

---

# プリーズ

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリーズ

### 【Zコード】

N4583M

### 【作者名】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

幼馴染みのタカコが田舎から出てきた。

東京に住む俺に会つて、見合いで結婚するつて言つ。

だからなんだつて思つていたら、今度は俺に抱けつて言つ。

女つて意味が分からない。

でも、抱きしめると女つてやわらかい。

あんなに細いのに胸がでかいのって犯罪だよな、でもって締まりなんかも良かつたら完璧とか通り越して罪悪感とか抱いちゃうよな、なんていうようなグラビアアイドルとエロいことする夢を明け方に見ちゃって、それがもうオレのなんかいつ勃つてないときがありましたつけ、なんてくらいガチガチで何度も何度もイッちゃつてよく夢精しなかつたよな、つていうか乾いちゃつてるだけだったらやたらと糊の効いたトランクスだこと、みたいな感じだったから、今日一番で携帯に電話してきた奴と何が何でもオレはヤル、と心に決めていたのは確かだけど、こういう時に限つて何年も連絡なんか取つたことのなかつた幼馴染みっぽい女からかかつてきちゃつたりしてどうしよう、とか焦つたのも確かに、つてより実は誰だか最初全然分かんなくて。

「……母ちゃんとかじゃなくて良かつたけど、」

「何が？」

何がじゃねえよ、うちの母ちゃん近親相姦用の造りじゃないし顔も身体も、とかくだらないことを考えないとどうも視線が固定されてしまうというかどうして数年振りに会つたこの女は高校のときより比べものにならないほど発達した胸になつちゃつてんだろ、つてほど風船玉みたいな乳になつてしかもそれを赤いレザーのぴつちぴちなワンピースでこれ見よがしに強調したりして、オレが知つてゐるこいつはもつと長い制服のスカートに三つ折ソックスしかも白、な、それで眉毛とかも結構太くて髪とかも真っ黒でぶつといおさげにしてて何十年代の女子高生ですかあんた、みたいなのだつたのに「じ」とをどうしゃつたらこんなお水っぽい姉ちゃんになるんだるうな女つてすげえ怖え、って言つかなんか。

「まあちゃん、格好良くなつたね」

「んあああ、おお、そうでもない、ぞ」

「女いっぱい泣かしてそう」

「泣かされる方が多いへタレだつて、あはは」

新宿駅の裏側で「一ヒー専門店でよく分からぬ南国音楽がかか  
る店内の一一番奥の席に座つていた幼馴染みはタカコといつ名前で、  
まあちゃんに会いたいけどどうすればいい、つて電話でいきなり聞  
いてきたからオレは東京在住だ、つて答えたうん今新宿、と明る  
く言われた。

秋口でなんだかすかすかとする九月の空の下、レザーのワンピー  
スはノースリーブで寒そつた、声だけじやなくて姿を見ても氣  
付かなかつたのは内緒だ、でもタカコはすぐに西口の改札附近にい  
るオレに気付いて甘い声でまあちゃんと呼んだ、オレもちょっとは  
垢抜けたつもりだつたのになんだかな田舎にいるときとやつ変わん  
ないかな、と思つたらちょっとへこんだ。

「でもさ、なんで」

「東京にいるか、つて？」

「おおお、そう、それ、ライブとかでも見にきたのか？ オレン家  
泊めるとか言つ？」

でもタカコつてライブとかつて柄じやねえな、と言いかけて飲み  
込む、昔のダサかつたときならまだしも、今なら何をしていてもそ  
れなりに様になりそうな顔立ちになつてる。肩甲骨くらいまでのス  
トレートな髪はマロンブラウンできらきらしているし、マスカラだ  
つてだまにならずに睫毛が長くなつて、もしかして睫毛パークと  
か。ふたりくらい前の彼女がそういうの好きだつたな、でもなんで  
別れたんだつけ、オレが浮氣したのかあいつがしたのか。

「言わないよ」

「あ、何が？」

「まあちゃん、人の話聞かないの昔からだね」

唇の色がカシスソーダみたいでそれが白い肌によく似合つていて、  
なのに笑うと白い歯がこぼれて見えて子供っぽい顔になつた、ちい  
さい頃のタカコだ、と思った。

なんとかかんとかマウンテンクリーミースペシャルとかとにかく長つたらしい名前の「一ヒーは深緑のカップに入れられて湯気を立てている。タカコのは白いボウルに入ったカフェオレ、それを両手で掴んで、あち、なんて慌てて手を離して耳たぶをつまんでいる、あ、オレこいつに突っ込みたいな、とかいきなり下世話な欲望がぐるりと脳内を一周してすぐく。焦る。

「つて、わあっ」

「え、え、なに、まあちゃん？」

「あー、なんかこう、何年振りだっけ、タカコ変わった、うん、あれ、オレ、きよどってる?」

「うん、ちょっと拳動不審」

「マジで? あー、なんかちつさい頃とか知られてる人間に会うのつて、」

「あ、嫌だつた?」

「嫌つて言うか、」

なんかこんなオレでも人生の積み重ねがあつてここまで大きくなりましたよ、的な、なんか。つて思つて、こいつに会うの十年振りだ、といきなり思い当たる。

「タカコ」十八じやんか

「なによいきなり、まあちゃんだつてそりじやん」

「おばさんだな」

「なんて失礼な」

「オレもおっさんだな、なんか高校とかの頃つて二十後半とか三十分かは超大人だと思つてたけど、そうでもない」

「私、結婚するんだよ」

はああああ? 人の話を聞かないのはお前も一緒だ、つていうかなんだそれ、と変な声が出て、タカコはさつきよりもっと子供っぽい顔で笑つた、いい感じに可愛い、今朝の夢に出てきたグラビアアイドルには負けるけど。

「あ、それ、シリコン?」

「は？」

「胸、胸、作り物？」

「違うよ生乳、本物本物。って、それより人の話流さないでよ、  
いやいやいや。幼馴染みがいきなり片道三時間の田舎から出できて  
てオレと「一ヒー飲んでるつてのも不思議だけどなんで結婚する  
とかつて言われてるんだかもよく分からぬ。」

「誰と」

「まあちゃんの知らない人」

「同級生とかじゃないのか、年上？ 年下？」

「年上、十くらい年上」

「くらい、つて」

「だつてお見合いなんだもん」

見合い… なんでこんな化粧の似合つ女になつちやつたタカコが  
見合いとかしてるんだっけ、と考えても答えは見つかないのでと  
りあえずおめでとうと言つてみたけど今度は寂しそうな顔になつち  
やつたから無意識に手を伸ばしてテーブルのひつち側からタカコの  
頭を撫でてみる。

「……まあちゃん、」

「見合いしてまで結婚したかったのか、でもまだ焦る年じゃないだ  
ろ？」「

「おばあちゃんが死にそつなの」

結婚の次は葬式か。

「……見合いは遺言か？」

「まだ死んでないよ」

「そろそろ死ぬのか？」

「人ん家のおばあちゃんになんて縁起の悪い

「つて、お前が言い出したんだろうが」

孫見せたいんだつて両親が、とか言つ、外見は変わつちやつたけ  
どいつまでも素直ない子なんだな、なんてちょっとほんつとする。  
「でもそれで結婚つて、いいのか？」

「良くないからお願ひしにきたの」

「おおなんだ、一緒に駆け落ちしてくれとかか？ いいけど金ないぞ」

お金があつたら駆け落ちしてくれるの？ と可愛く聞かれてううんと首を振る、無理無理、駆け落ちとかそんな、オレはまだひとりの女に絞りたくない、恋人ひとりよりセフレいっぽいの方が欲しいお年頃、あ、でも最近ちょっと弱くなってきたからいっぽいは困るな、三、四人で充分だ。しかも毎日とかはやめて欲しい、三日に一回頑張ればすごい頑張つてる感じ。

「まあちゃん、私を処女にして」

「おおなんだそんな願いは容易い……は？ 女、じゃなくて？ 処女？」

なんだそれ、と変な声を上げるオレに、タカコは唇を横に引き伸ばしてどこか小悪魔ちっくにうぶふふふふんなんて笑う。

タカコとは生まれる前の産婦人科からずつと同じ町内だった、それで小中高と同じ学校で家も隣の隣の隣ででもアウトオブ眼中なくらい趣味じやなかつた、オレはもつと身体のラインとかが露骨なくらい、痴漢にあってもあんたも誘つたんじやないですかとか平氣で言われちゃうような出るところ出て引っ込むところ引つ込んで頭とか中身よりはバカでもいいから外見美人ちゃんが好みで、だからどつちかつていうとタカコは真逆ではないけど正反対な位置に突つ立つてゐる女ではあつたから興味がなかつた。近所のタカコちゃん、林さん家のお姉ちゃん。

「私ね、ヤリマンなの」

おお、そういうのを自分で言つ女つて結構うぶかつたりしてオレ嫌いだ、しかもブスが多いんだよな、セックスの数イコールモテてる証明じゃないつつの、男なんて酒でも飲んでて相手に穴開いてりや誰でも相手できるもんなんだから、愛がないとエッチできないよなんて言つ男の方がよっぽど裏でなに考へてるか怖くなる、セック

スなんて穴と棒でするもんだ、顔はいらない、究極論で言つてしまえば。そりや、顔も身体も極上級の綿まりも最高ぢゃんな女のいのは言つまでもないけど。

オレが何も言わなかつたのでタカ口は不服そつな心配そつな、とにかく複雑な顔をする。うんまあ、と口の中でもそもそと明確には伝わらないように言葉を転がす、タカ口、ヤリマンは自慢にならないここは田舎じやないモテてる証拠にもならない同情もしないオレもやらしてもらえたの、くらいの卑下た感想を持つてもらえば上出来なだけだからそういうことは言うな、と言つてやらないけど思つて、テレパシーとかが使えれば楽だろうけど思考が駄々漏れになるからやつぱりそんな能力は要らないや。

「……ああ、えつと、ふうん？」

「……軽蔑、する？」

「まあ、人数とかにもよるし」

「五十七人」

数えてんなよみみつちい、即答するなよ恥ずかしい。でもちよつと驚いた、オレまだそんな数の女とは寝てないな、うん寝てない、寝たいかつて聞かれれば悩むけど七分くらい考えたら首を横に振るかもしけない、十代ならまだしも今は別にいいや数より質つて言うか、終わつた後面倒でないほつといてくれるけど身体のどつかだけは触れ合つたまんまでいたいとかつてちらりと甘えてくるような女が好きだから、そういうのが隣でにっこり目が合つたときだけ笑つてくれるのがいいから、やっぱ数じゃない、こっぱい寝るつてことはオレが気に入らない女にもぶつかるつてことだし。

「自慢、だつたら意味ないからやめとけ」

「自慢じゃないよ、」

「誘い文句にもならないぞ、何百人と寝たつてやる気がなければマグロ女はマグロのまんまだ」

なんだか言いたいことがズレてんな、と思いつつまいいや、それでどうしようか、と聞く。タカ口に。毎過ぎの駅前は人と光が溢

れでいるからなんでここにタカコといるんだっけオレ等付き合つて  
るんだっけとかつて間違つたことを平氣で考えてしまつたりするタ  
バコやめようかな酒はやめらんないけど脳に支障を多く与えるのは  
どつちの方だろう日本語自体使い方を間違えてそうで自信がない。  
「ところでオレ、魔法使いとかじやないんだけど」

「え、なに、まあちゃん東京でなにしてんの？」

「なに、つて、働いてるよちゃんと、それなりに」

なにして、つて聞かれないままタカコはふうんとか呟いた、オレ  
もフーツク店の呼び込みまでさせられて女の子にどっちかつつうと  
舐められてる類のボーイさんやつてます、なんてことはここで暴露  
したくないししてもタカコなんてまたふうんとか言うだけだろうけ  
どあんまり言いたくもなかつたからそのままスルーしてくれて良か  
つたとか思う。

「あのさ、だからお前を処女にするとかつて無理なんだけど」

「知ってるよ、まあちゃんが処女膜再生できる男だつたらもつと有  
名人だよね、つていうか、それつてお医者さんになるのかな、超能  
力者みたいなものになるのかな」

「知らんけど、今より金持ちにはなれそうだな」

「処女になりたい女つているのかな」

自分のことは完璧棚に上げたまんまでタカコが言う、唇を尖らせ  
て上目遣いにオレを見る、アパートに連れて帰つてみたいけどそれ  
つてどうだろう、朝のエロい夢のように女抱きたかったんだけどな  
んかちょっと違う雰囲気、とか思つていろいろにタカコはマスクカラで  
ばしばしに伸ばした睫毛の下の田をくりくりさせて、私まあちゃん  
と寝たい、とか言ってオレを驚かせる、なんだそりや。願つてもな  
い、いやいや、あんたさつき結婚するとかつて、いやいや、なにが、  
なんで、美味しくいただきますつて言うには微妙なんだな幼馴染み  
つて立場が、いやさつきはセックスなんて穴と棒の運動とかつて言  
つたけど、ええと。

「あのさ、ほら、まだ処女だった頃の私を知つてゐる人と寝たりし

たら、あの頃のまっさらな気持ちに戻れるかな、とかつて思つて  
いやいやいや、経験値がひとつ増えるだけなんじやん？ つて言  
つていいものか分かなくて大体まっさらな気持ちつてなんだろう  
白いつてことか青いつてことか。青春つてどうして青いんだつけ、  
白いのつて秋だつたつけ、確か夏は朱色だつたけどじやあ冬つて何  
色だ。

「理論無茶苦茶、タカコさん」

「分かつてるよ、そんなの、分かつてる」

「なんで処女に戻りたいんだよ、結婚するから？ 綺麗な身体で嫁  
ぎたい？」

そんなんじやないよ、つて声がすぐ近くで爆発したからなんか  
のスピーカーとかから変な宣伝の声がボリュームを上げられてオレ  
の耳を直撃したのかと思ったけど、それは歩くのをいきなりやめて  
立ち止まって拳握り締めて叫んだタカコの声だつた。通りを歩く人  
がちらりちらりとこっちを見る、歩いてくれよ頼むから立ち止まつ  
て人の流れを止めんなよ、注目とかされたくないんだからなんかこ  
う、人から見られると自分はちっちゃくて汚い虫になつた気がして  
くる。

「そんなんじやない、」

「あーあーあー、分かつた分かつた、分かつたような口を利いた才  
レがごめんね」

「まあちゃんは、」

ちつとも分かつてないくせに、つてタカコがさつきより唇をうん  
と尖らせてうるりとした目をしたから、なんだかちょっと腹が立つ  
てなんだよ一体オレこれでも夕方から仕事行かなきやなんないし土  
日休みじゃないし新人のマキはちつとも言うこと聞かねえしマネー  
ジャーは喋り方がいちいちムカツクし、なんて関係ないことまで思  
つていろいろつとして、仕方がないからタカコに近付いて手首を掴  
んで尖った唇にいそいで自分の顔を持つて行つてちゅつとくちづけ  
た。

つるやい女を黙らせましょ、お口を塞いでしまいましょう。

今更驚いて後ずさるけど手首を掴まれて逃げられないタカ口は真っ赤になつて、キスのひとつやふたつでうろたえるなよお前ヤリマンとかつて言つても所詮男に騙されて経験数だけ増えちゃつたマグロ女だなまつたく、とかつて思つてしまつた、そしてオレは知らない通行人からピューワイツとブラボーな口笛を貰つてありがとうな気持ちになる。

ホテルは嫌だとか言つし金もそつあるわけじゃないから結局オレのアパートに行くことになる、新宿駅から電車で一本田舎にいた頃は東京なんてネオンと騒音だけで成り立つてゐる蜃氣楼だと信じていたけどそうでもなかつた。

「……狭い、」

ぐるりと見回して万年床に眉を寄せてる、タカ口さん東京在住の田舎者つて貧乏なんスよ学生で仕送り有りとか素晴らしい会社に勤務しているとかであつたつてそこそこのんスよ、言わづもがなオレなんて。六畳の狭いお城、だけどあんまり物はないからそう窮屈な感じはしないだろうと思つていただけど自分だけだつたみたい。

「でもそんなに汚くはないね」

飲み物をいれるカップもないから冷蔵庫からビールを取り出す、カップ以前にインスタントのコーヒーをえない。差し出したら首を振られた、いらない、のジェスチャー横に何度もぶんぶんと。その度にタカ口の髪が揺れて彼女の頬や首に絡みつく手前の軽さで広がつた、花の匂いがする、女の子つて香水つけてないと何が匂うんだつたつけシャンプーだつけ。

「処女、抱いたことある?」

「あるようないような  
「なにそれ」

「あんなの自己申告制だからな、処女です、処女じゃないです、なんでも言えるひつの」

そうなんだ、とタカコは「ゴロゴロする灰色のカーペットの上でお姉さん座りをしている、正座を横に崩したようなやつ、スカートが思っていたよりも微妙な長さで脚がすらりと伸びるけどパンツは見えない、みたいな。オレはプルリングを引いてビールを流し込む、喉の奥がちらちらとして飲むたびにいつも、実はあんまりビールって好きじゃないのかも、と思う。カーペットを撫でているタカコは俯き加減で、ダニとか気にしてんだつたらオレも痒いのは苦手だから結構バルサンだけはちゃんと焚いたりするんスよ、と言つてみたくなるけどきっと彼女の頭の中はそういう考え方じゃないものが詰まつてると思うからやめておく、とかつてこんなところで気を使つても仕方がないんだろうけど、あ、バルサンまた買つておかないといつに刺されると赤い点々にふたつ吸い口というか血を吸つたのはここなんです、つていう印が並んでつくからそれがものすごく気持ち悪くて嫌だ、目に見えないようなものに刺されたりするのって腹が立つし怖い。

ぐびび、とか変な風に喉が鳴つてタカコがこっちを見た、ふたりの間には思い出話しかないから意地でもしないでおこうと心のどつかで決意してみる無駄に。過去ばかり持ち出して盛り上がるのつて主役不在の誕生日会とかみたいでどこか落ち着かなかつたり寂しくなつたりする気がするけど、それはオレだけが持つ感情なのだろうか。

「……わつき、キスした」

「あああ？」

「……なんでもない、」

なんでこいつはここにいるんだろう、オレが抱いたら処女に戻れるかもなんて滅茶苦茶な思想だ、大体オレに処女膜再生能力とかがあるんだつたら今頃女達は列なししてこのアパートに押しかけてるだろ？ テレビとかにも出て有名になつてて金持ちにだつてなつてるだろ？ つて、今どき処女とかにそんなこだわる女もいるのか価値をつけるのは抱く側だから処女好き男がたくさんいるのか、考えてい

て混乱してきたのでやめる。ビールを飲む。「ぐん。あ、さつきの話はしたんだっけ。

「タカコ、なんで東京にいるんだよ」

「え、だから、えつと、」

「結婚嫌で逃げてきたんじゃなくてか?」

「逃げてなんかきてないよ、ほら」

財布から紙切れを取り出してひらりと見せつける、電車の割引回数券。帰るつもりがありますよ、ってことだらうが、でもそんなの破つて捨てちゃえはなんにもならないもんね、と意地の悪いことを思う、大体。

「大体、見合いでまで結婚したいってなによ、してもそんな年上の奴と」

「……もう、いい年なんだもん」

「いい年、つて、あー、女の適齢期つて今はどんくらいなんだろうね」

「知らない、でももう遅いと思つ」

「高齢出産も増えてんでしょ、大丈夫なんじゃん?」

「そりは言つても年寄り女より若いの方を好きなくせに」「

「誰が? オレが? どうだろ? 今までの恋人達は年上も年下も同じ年もいたし。結婚、はまだ考えてないし。オレは。自分以外を食わせていくだけの自信も金もないから、つてずるずるしてるうちに誰かを孕ませて身を固めたりすんのかな、できちやつた、つて若いうちとか狙つてとかならいいけど、オレみたいないい加減な奴がするのは格好悪いな。

まだ日が高いうちのセックストで苦手だ、罪悪感はないけどこれでいいのかつて気分になる、もつと生産的に行こうよ、つてす"い生産的なことなんだけど避妊しなければ。もう一本ビールを持つてくる、勢いつけなきや女抱けないつてなんか嫌だなでも幼馴染とかだぜ制服姿も処理してない脛毛も知ってるんだぜ、それつてどうよ。

「あー、でもどうせなら結婚する前に初恋の男に一皿会いにきた、とか言う方が可愛いのに」

って言つたらタカ口が真っ赤に耳まで染まつた、え、なに、それって、図星？

わあ、とか思つたら可愛くなつて前からこの女を好きだつたよつな錯覚まで起つてしまつて、タカ口、とかつて甘い声が出てしまつ、この唇から。ビールの缶をそちらへんに置いて、す、とタカ口に寄る、お互いの間の空気をぎゅっと凝縮するように、近付いて肩に手をかけよつとする。

「まつ、」

あ、ジタバタし始めた。

「まあちやんつ、やつぱ、私、か、帰る、」

「何言つてんだよこゝまできてさ、そんな寂しこと言つなんよ」

ラブホテルに女騙して連れ込んだ男のセリフみたいだな、と思うと笑いそつになつたからぐつと堪えて、タカ口、ともう一度名前を呼ぶ、だけどオレの手を彼女はするつと抜け出さうとする。

「やつぱ、いい、」

「タカ口ー、お前から誘つたくせ！」

あ、泣きそうな顔になつた。女のそういう顔好きだな、笑つてゐより泣くか怒るかのときに表情がいい女が本当の美人だつて聞いたことがあるな、オレ、どうでもいいことばつか考へてる、本当はタカ口を抱く気がしない、というより本当に抱くのオレ？ みたいな感じだ、だつてお互い年を取つたと言つても高校や中学の制服姿どころか幼稚園の頃の黄色いスマッグ姿が脳裏にちらつくんだもの。目の前の女がどんなに乳をでかくした見た目は成熟済みの女でも違和感の方が先に立つ、あれあれあれ、つてな具合だ。

「やつぱやだつ」

「なんだよお前、東京までオレをからかいにきたのかよー」  
手を出したり拒まれたり近付いたり離れたり、こんなにどたばたするのつてなんか違うよな、ムードとか作るべきなんじやなかつた

つけ、これじゃやりたい盛りの中坊が女を追い掛け回してゐるみたいだ、つて笑つてたらビールの缶が爪先がどつかに当たつて倒れた、タカコが、あーっ、と声を上げる。

「雑巾！」

「そんなもんないつて」

「じゃあティッシュ、」

「あー、いい、いい」

「染みちゃうよ、カーペットダメにしちゃう、」

まあそんなのはいいから、とこぼれたビールに氣を取られているタカコを抱きかかえるようにして捕獲する、唇を近付けちゃつて、そういえば今朝の夢はなんだつたつて、と考えてみる。まあいいや。それより腕の中の女が暴れようとするのでちょっと力を入れる、唇を耳元に寄せて名前を呼ぶ、タカコ、もう一度繰り返して、もう一度、やがて彼女から抵抗が消える。はい、オレの勝ち。

じつちを向かせて唇を寄せる、タカコは目を瞑つたからそれを確認してからこっちも目を閉じる、重なる、やらわかな感触、ああ女抱くのつていつ振りだけ。

唇を舌でこじ開けて進入しようとしたらタカコの身体が少しだけ硬くなつた、そして笑い出す。

「なんか、」

なんか変なの、ね？ タカコの声がうんと近くで聞こえる、吐息を肌で感じるくらい近くにいるからだ、幼馴染だからつてそんなに近付いたことは今までなかつた、これもひとつの中坊の初体験。

いいから黙れよ、つてどこか強引めかせて再び唇を重ねる、タカコは静かになつて身体から力を抜く。だけどまだオレはどこか半信半疑でこのままタカコを抱いちゃうのかな、なんて思つてる、もう一度笑つてくんないかなタカコ、そしたら[冗談にしちゃえるな、つて男らしくないことを考えて、もっとビール飲んどきや良かつた、なんてちぢりつと思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4583m/>

---

プリーズ

2010年10月8日14時23分発行